私の「邪馬台国」

鹿児島大学名誉教授　北　野　元　生
（元　口腔病理学講座）

梅一輪ヒミコと今夜飲み明かそ（季語：梅一輪，春）
北野元玄

これ俳句である。時空を超えた空想俳句と考えられてもよいし，ヒミコという名のバーのママさんを連想してくれてもよい。元玄とは私の俳号である。昨年の建国記念の日には伊勢神宮にお参りしたが，今年は宇佐神宮に出かけた。境内の白梅が満開で，好い香りがただよっていた。そんな時にふと出来あがった俳句である。世の中には宇佐が邪馬台国であると論じている人も多いが，そんなことが頭の片隅を過ぎったのであろうか。

タイトルが私の「邪馬台国」となっているが，私のと断っている以上少なくとも通説の邪馬台国論とは異なっているところがなければならぬ。古代中国の正式な史書である三国志魏書東夷伝の中の一部である通称魏志倭人伝（以下，倭人伝と略称する）が伝える邪馬台国の位置の比定については，九州説では博多湾一帯，筑前島原，筑後八女，筑後山門，筑後川流域，豊前京都郡，豊前宇佐などがあり，畿内説では奈良盆地一帯，大和三山，大和郡山，大和纒向などがある。ほかに，国内では富士山や八ヶ岳，海外ではスマトラ，ジャワ，エジプト等々上げればきりがないほどである。

私は人も知る（もっとも，圧倒的大多数の人は知らないと思うが）古代史狂いであり，とくに邪馬台国の場所比定に関する議論についてはかなり詳しいつもりでいる。しかし私の「邪馬台国」論の根幹となすものは，実は次のようなものである。すなわち邪馬台国は九州でも畿内でもないと言うことである。倭人伝に言う対馬，壱岐，伊都，奴，等々邪馬台国にいたるまで，九州や本州にあらずと言いたいのである。大体倭人伝の冒頭にある狗邪韓國を日韓中の専門家を含め多くのヒトが間違えている。倭人伝をよく読んでみるが良い。冒頭，「倭人は帯方の東南大海の中にあり，山島に依りて國邑をなす。旧百余國。漢の時朝見する者あり，今，使訳通ずる所三十國。郡より倭に至るには，海岸に循って水行し，韓國をへて，あるいは，南しあるいは東し，その北岸狗邪韓國に至る七千余里。（読み下し文，以下も同じ）」とある。ここに言う郡とは帯方郡のこと。いまのソウルのあたりである。私が注目したのは狗邪韓國のことである。一般に狗邪韓國とは弁韓の一つで加羅すなわち金海付近の小国を指すと考えられているが，そもそも狗邪韓國との記載は魏志倭人伝を含むおおもとの三国志の「韓国伝」にはまったく見られない。韓国と言うからにはもっと大きな単位の国を意味するのではないか。たとえば辰韓（のちの新羅）馬韓（のちの百済）弁韓（のちの任那）などの大きさと体裁を整えた国の単位を云い，加羅すなわち金海付近は狗邪国として記されているだけである。であるから，狗邪國が辰韓，馬韓，弁韓に匹敵する大きな国単位であるならともかく弁韓の中の小地方国に過ぎないのであるから本文中の狗邪韓國をもって小国である狗邪国と解釈するには躊躇するものである。また，文中の「その北岸狗邪韓國にいたる」とある北岸の理解についてであるが，日本列島に向いている朝鮮半島の南端部ないしは東南端部を北岸と言うだろうかというのが素朴な疑問である。朝鮮半島の南（東）端部は地形の出入りが激しくまた島嶼にとんでいるので，東西南北いずれの方向にも向いた多数の大小の港があり，したがって多くの北向きの港があってしかるべきだろうとしても，そもそも朝鮮半島の日本海側を北岸と称したとするならば，三国志あるいは魏志倭人伝の筆者の思い違いや記載間違いでは済むまい。以下は私の独断であるが，九州（および西日本のかなりの地方）はその頃韓国の一部であり，九州および西日本のかなりの地域は一つのかなり大きな単位での国（クニ）をなしており，および狗邪国と地理的にも政治的，経済的に密接な関連のあることもあって，倭人伝の筆者が漠然と狗邪韓國と仮称していたのではないだろうか。北岸と言うからにはこれはむしろ朝鮮半島のどこかではなく，九州の北岸，すなわち長崎，佐賀，福岡三県あたりを指していると思われる。あるいは山口県や島根県などでも良いのかも知れない。独断のついでに言えば，倭人伝が書かれた頃は朝鮮半島と日本列島の主要部分（北九州と山口，島根など）はほとんど一つの国単位，あるいは地域単位のいわゆる狗邪韓国として存在していたか，あるいは中国人がそのように理解して

いたと言うのが私の意見である。

次に「始めて一海を渡ること千余里，対馬國に至る。（略）居る所絶島にして，方四百余里ばかり。又南に一海を渡ること千余里，名づけて瀚海（かんかい）と曰う。一大國に至る。（略）方三百里ばかり。（略）」とある。その北岸狗邪韓國からはじめて海を渡ると対馬国にいたり，さらに海を経て一大国にいたるとある。古代史の専門家はこれを対馬国は長崎県の対馬，一大国は壱岐であると解説する。対馬国と対馬は字面がまったく同じだが，一大国と壱岐ではかなり違う。一大は一支（いちきと読む）の誤植であり，壱岐と同じであると強権付会的に解説するのが一般的である。

次に，「又一海を渡ること千余里，末盧國に至る。四千余戸有り。山海に沿いて居る。草木茂盛して行くに前人を見ず。好んで魚ふくを捕うるに，水，深浅と無く，皆沈没して之を取る。東南のかた陸行五百里にして，伊都國に至る。官を爾支と曰い（略），千余戸有り。世王有るも皆女王國に統属す。郡の使の往来して常に駐る所なり。東南のかた奴國に至ること百里。（略）二萬余戸有り。東行して不彌國に至ること百里。（略）千余の家有り。南のかた投馬國に至る。水行二十日。（略）五萬余戸ばかり有り（略）。南，邪馬壱國（邪馬台國）に至る。女王の都する所なり。水行十日，陸行一月。（略）七萬余戸ばかり有り。女王國より以北はその戸数・道里は得て略載すべきも，その余の某國は遠絶にして得て詳らかにすべからず。」とある。そもそも一大国の理解の仕方が日韓中を問わずイイ加減であるから，対馬国を含めほかの地名についても信頼に足るものであるとは言えまい。末盧國が松浦半島，伊都国が糸井郡，奴国が那の津（博多）であると言われても，語呂あわせに終始しているだけであると批判されても仕方がない。邪馬台国の発音がヤマトに近いと言うことで，大和や山門が邪馬台国の候補になるのは必然の帰結であった。しかし，倭人伝に記載された方位や距離が邪馬台国を日本列島のどこに当てはめようと，実際とは大幅に異なることから，大変苦しい言い訳がされることとなった状況についてはここでは触れない。

倭人伝の最後の方に次の記載がある。「女王國の東，海を渡る千余里，また國あり，皆倭種なり，また侏儒國あり，その南にあり。人の長三，四尺，女王を去る四千余里。また裸國・黒歯國あり，またその東南にあり。船行一年にして至るべし。倭の地を参問するに，海中洲島の上に絶在し，あるいは絶えあるいは連なり，周施五千余里ばかりなり。」魏志倭人伝が取り上げた時代は，おそらく日本では弥生中期頃であったろうが，匈奴対策に追われていた中国人にとっては海の向こうの人々は狗邪韓国を除いて皆倭種であると一括して考えていたのであろうし，海の向こうがどうなっていることなど伝聞に頼るしかなく，ほかに詳しく知る方法もなかったし，またその必要がなかったと思われる。この項についてのみ言えば，記載の内容は大雑把で捉えようもないほどである。年中温暖であるとの先の記載や裸国などの語句を見ると，邪馬台国が九州などよりずいぶん南にあったようにとれる。黒歯国との記載がある。あわて者はこの記載だけで，お歯黒の風習の伝統を有する日本を以って倭国を連想するが，お歯黒の風習はアジアの広い領域に見られたもので，日本に特有の文化とは言えない。また魏志より以前の史書である後漢書によれば邪馬台国はフィリピンあたりであるとの記載がある。神戸大学名誉教授の内田吟風氏はジャワやスマトラあたりを想定している。

私の言いたいことは，明々確々たる証拠が出るまでは，少なくともあてどない邪馬台国探しなどは休止して，その労苦をもっと違う方向へ向けた方がよいのではとの一語に尽きる。というのが『私の邪馬台国』の概略である。

鯨面の卑弥呼は鬼道イワシ雲（季語：鰯雲，秋）

北野元玄

鹿児島大学に奉職中西サモア国（現在はサモア独立国）やトンガ王国に滞在したことがあった。両国とも島嶼からなる島国であり人口はきわめて少ない。人々は人種的にポリネシア人に属する。いわゆるポリネシア人はもともと東南アジアに起源を有し，モンゴロイド人種的特長を維持し，われわれ日本人と一致するところが大きい。紀元前より太平洋諸島に進出したものと考えられる。西暦500年頃，アフリカを起源とするであろうところのメラネシア人がパプアニュウギニア等を中心に大進出してきたため，ポリネシア人はその主たる住処をかなり西側のたとえばハワイ諸島，ニュウジーランド，サモア諸島，トンガ諸島等々に移さざるを得なかったのであるが，その頃までは太平洋の諸島嶼はポリネシア人の天国であったろうと考えられる。ここで，魏志倭人伝が伝える内容が西暦200年ごろの出来事であることを考えると，中国人の言う倭とは狗邪韓国以外の日本列島だけを指すのではなく，太平洋海域全体を指していた可能性が大きいと思われる。のちに奈良時代平安時代の頃までには政治的配慮もはたらいて，倭といえば日本または日本列島，あるいは日

本人を限定的に指し示すように日中および韓ともに定着してしまったのであろうと考えるのはきわめて自然ではないか。

大体，日本書紀が編纂された時代（８世紀の初め）のわが国の学者連中にして，数百年も以前に書かれた倭人伝とあるのをもって，日本人の歴史であると錯覚してしまったのである。それ以降の歴史学者や博物学者は単に日本書紀に倣ってその意見を踏襲したに過ぎないと感じてならない。大昔の中国の人々は，中国とは異なった文化や言語を有している何千と言う島嶼を有する広大な太平洋海域を倭と称し，そこに住む人々を倭人と称したのではあるまいか。九州のあるいは畿内の邪馬台国あるいは卑弥呼ではなく，もっとスケールの大きな太平洋海域中の邪馬台国と言う観点から，魏志倭人伝の解析を見直すべきなのではないか。

繰り返す。倭人伝の云う狗邪韓國の北岸とは九州島の北岸を指しているとしか考えられない。以上，歴史学者でもない私の雑駁な暴論珍説を披露させていただいた。

神の留守迷子の台与は泣くばかり（季語：神の留守，冬）
北野元玄

イッシーに囁くヒミコ雲の峰（季語：雲の峰，夏）

今回，鹿児島大学歯学部30周年記念誌を作るので何か原稿を書くようにと依頼された。私は神話の郷である鹿児島に，17年間お世話になった。古代史狂いではあったけれど南九州や西南諸島から太平洋海域についての実際的な土地勘があったわけではない私にとっては，この17年間という期間は記紀や魏志倭人伝を考察する上でも，とても楽しくまた嬉しいものであった。加えて，ATL ウイルス（HTLV-ウィルス）の調査を兼ねて西サモアやトンガ王国に滞在することができたし，ハワイやニュージーランド，グアムにも行った。太平洋上の ATL ウィルス伝播の経路や歴史については実際的な土地勘を持って考察することができるようになった。別に，ハブ毒の研究で毎年のように奄美大島に出かける機会を得た。ご承知のように日本列島ではハブとマムシはきれいに棲み分けが成立している。ヘビとくに毒蛇の日本列島での分布とそれに至った生物史（毒蛇生態史とでも言うか）について，それなりに考える機会が得られた。ATL ウィルスの伝播はもちろんヒトの集団の移動によってもたらされるし，ハブとマムシの棲み分けについても，ヒトの移動定着と無関係ではあるまい。太平洋を渡るたびに古代とくに倭人や邪馬台国を俯瞰する気分になれたことは私にとっては筆舌に表わすことのできないほどの喜びであった。ここに，多くの関係者に深甚の謝意を述べる次第である。

最後にヘビの句を二句。

簪を刺しながらへび穴を出る（季語：蛇穴を出る，春）
能勢京子（船団71，2005）

蛇穴を出て天才の喉仏（季語：同上）
鳥居真里子（船団74，2007）